



緊張した面持ちながらも熱心に説明に耳を傾けるメンバー。カゴメの新商品発表会で

食の最先端に触れる

企業に学ぶ農産物の出口戦略

マーケットセンスを持った新時代の農業人の育成に取り組む横須賀商工会議所の「産農人」プロジェクトでは、三浦初声高校都市農業科の生徒らに多様な学びのチャンスを提供している。栽培技術の習得や加工品の製造実習は、すべて現場の第一線で活躍するプロが指導。大手食品メーカーのカゴメも参画しており、消費者ニーズを捉えるためのマーケティングをアドバイスしている。「生産―加工―流通―販売」という一連のプロセスを体験できる実践型の研修は、ここでもしか学べないカリキュラムとなっている。

東京・秋葉原で開かれたカゴメ主催のイベント「ベジタブル・ソリューション」。新商品発表の場である会場には、スーパーのバイヤーや飲食関係者に混じって学生服姿の「産農人」メンバーの姿があった。一般の入場は制限されているが、同社の計らいで食品業界の最先端に触れる機会を得ることができた。

メンバーは、新たに市場投入されるラインナップを試食しながら開発の狙いやターゲットなどのレクチャーを受けた。日本人の野菜摂取の実態を学ぶセミナーにも参加した。厚生労働省が推奨する1日の野菜摂取量350gに対して、60g足りていない現状を知るとともに、同社がこの不足分を効率的に取り入れることに主眼を置いて野菜ジューズなどの商品開発を行っていることを理解。ビジネスの原点がマーケティングリサーチにあることを学んだ。

食の新潮流である「ビーガン」（完全菜食実践者）の言葉にも触れた。訪日外国人のうち、全体の約5%がビーガン・ベジタリアンであり、需要の高まりが予測されている。このニーズに対して、メーカーや飲食店が動き出していることを聞き、秋元流椰さん（2年）は「生産者もトレンドをいち早く掴んで、ビジネスチャンスとしていく発想が欠かせない」と感想を話した。

商議所の一連の取り組みは、産業界の視点で地域農業の縮小を食い止める狙いもある。市場を分析してニーズに沿った作物を生産・流通させることのできる人材の育成に注力している。

若者の農業参入を後押し

鈴木優也さん

「産農人」メンバーに、農業のイロハを教える指導役。週に1回、畑と一緒に汗を流しながら、未来の農業のめざすべき姿を語り合ってきた。繰り返し伝えてきたのは、「農家」から「農業経営者」への脱皮だ。安心・安全・美味しい農産物をつくることは当たり前。「消費を意識した生産がこれからの農業には欠かせない」。これを実践し続けるには、1人の力では限界があり、地域農業を守る視点からも組織化が重要となっていく。「就農を求める非農家にチャンスを与えたい」。メンバーと過ごす時間を通して、自分の役割が見えてきた。



活動報告会——「産農人」多様な学び得られる場

「産農人育成プロジェクト」の活動を総括する報告会が開かれ、6人のメンバーが関係者を前に学びの成果を発表した。

1期生で卒業を控える齋藤輝さんと荻津伊吹さんは、幅広い視点で農業を捉えるきっかけになったことを「成長」の言葉にかえて感謝を伝えた。高校生フアーマーとして実家の農園を管理している齋藤さんは、多目的栽培など経営改善に取り組んだことで4・5倍の売上げ増を実現したことを報告。荻津さんは、印象深い出来事に台風被害を挙げ、農業経営にリスク管理が欠かせないことを話した。

来年度の展開についても話し合われ、加工商品の製造・販売をゴール目標とすることが確認された。



「産農人」プロジェクトの構成メンバー